

編集後記

「施設」は今、いろいろの意味で曲り角にあります。否、変革の時期にあるといった方がよいかも知れません。1つ目は国立病院の統廃合にみられるように、医療施設の見直しです。2つ目は、医療機関から出された患者・障害者の方々の受け皿としての、保健・福祉施設づくりです。これは「地域ケア」の精神から、できるだけ小規模で、地域性の高いものがよいという方向です。3つ目は既存福祉施設の中味の見直しです。2つ目の中間施設の役割りのものが、特に老人と精神障害者のために続々用意されようとしています。デイ・ケアセンター、共同作業所、地域密着の特養老人ホーム etc. また、既存の福祉施設（療養施設、重度身体障害者更生援護施設など）は、従来の生涯収容施設的な役割から、地域の中での「必要な時にいつでも利用できる社会資源」的位置づけに再編制を迫られつつあります。つまり、人々の生活は、原則として「地域」であり「在宅」であるべきという思想が、着々と現実化しているようです。この傾向は、いろいろな面を含みつつも我々リハビリテーションを業とする者にとっては歓迎すべきことも多いといえます。「リハビリテーションの時代の到来」ともいえるからです。しかし、喜こんでばかりはいられません。肝心の専門スタッフ

の定員の増加はないのです。PT・OTにとって厳しい時代がきたなあと感じています。

ともすると日常の臨床の多忙さの中でハッピーでいられる PT・OT ですが、秋たけなわの今日この頃、頭がクリアなところで、こうした現状を知る上で、今特集号「リハビリテーション施設体系」を読んで視界を広げて頂きたいと思います。

黒田大治郎氏は本誌でもたびたび御執筆頂いており、“障害者の施設を論じさせたらこの人の右に出る者なし”の権威者です。また、関昌家氏は精神障害者のために、岩崎テル子氏は老人のために御努力なさっている OT です。御二人の論文にはきわめて今日的な施設像が浮き彫りにされています。PT の河合かづ子氏には東京都荒川区における地域リハビリテーション活動を通じて施設を論じて頂きました。私の勤務する大学も荒川区にあり、この大学も「社会資源」として地域に有効に活用頂ける日が一日も早く来ることを念じました。

(寺山 久美子)

くお詫び：都合により、本号掲載予定の講座「手指の障害学（基礎編）3. 手指の障害（阿部宗昭・他）」は都合により、休ませて頂きました。次号（20巻11号）に掲載いたします。（編集室）>

理学療法と作業療法

（第20巻 第10号）

1986年10月15日発行（毎月1回15日発行）

1部定価 1,250 円（配送料60円）

（年ぎめ予約購読料 15,350円）
（ただし、特別増大号を含む）
（送料弊社負担）

発行 株式会社 医学書院

代表者 椿 孝雄

〒113-91 東京都文京区本郷5-24-3

電話 受付台 (03) 817-5600

本誌編集室直通 (03) 817-5703

（担当：西塚・細田）

販売部直通 (03) 817-5659・5660

広告室直通 (03) 817-5696

ファクシミリ (03) 815-7802

振替口座 東京 7-96693番

印刷所 ㈱学術図書印刷 電話(03)814-4961

広告申込所 ㈱医薬広告 電話(03)814-1971

Published by IGAKU-SHOIN Ltd. 5-24-3 Hongo, Bunkyo-ku, Tokyo © 1986,

Printed in Japan

本誌の内容を無断で複写・複製・転載すると、著作権・出版権の侵害となることがありますので御注意下さい。

<編集顧問>

天 児 民 和
九州労災病院名誉院長

五 味 重 春
東京都立医療技術短大長

砂 原 茂 一
国立療養所東京病院名誉院長

津 山 直 一
国立身体障害者リハビリセンター総長

（五十音順、以下同じ）

<編集委員>

上 田 敏
東大リハビリ部

荻 島 秀 男
ペインリハビリテーションクリニック 高島平整形外科

大喜多 潤
兵庫県リハビリセンター

寺 山 久美子
東京都立医療技術短大

富 岡 詔 子
信州大学医療技術短大

奈 良 勲
金沢大学医療技術短大

福 屋 靖 子
筑波大学

松 村 秋
東京都立医療技術短大

<編集同人>

池 松 洋 子

伊 東 元

岩 崎 テル子

宇都宮 初 夫

金 子 誠 喜

鎌 倉 矩 子

木 村 信 子

菊 地 延 子

小 嶋 裕

斎 藤 みち子

鈴 木 明 子

高 橋 正 明

田 口 順 子

橋 元 川 隆

古 沢 宏 博

松 崎 和 子

宮 前 珠 子

山 田 貞 雄

矢 谷 令 子